

れている。過剰のABAは、グルコシドになって解毒されるが、phaseic acidからdihydrophaseic acidになって活性を失なう。水分ストレス植物では、ABAレベルは10倍位に高まるが、水分供給により再びABAレベルが低下する。

ABAは、核酸合成の障害を通じて生理作用をあらわす。主な生理作用は、種子・塊茎・枝条の休眠誘導・葉の老化・気孔の開閉、発芽

障害や離層形成などである。ABAはオーキシン、ジベレリンやサイトカイニンによっておこる生長を障害する例が多い。ABAによる気孔の開孔作用はオーキシンにより抑制され、ABAによる葉の老化・ウキクサの生長障害は、サイトカイニンで回復する。ABAによる α -アミラーゼ合成障害は、ジベレリンにより回復する。また、ABAによる落葉作用は、エチレンが関与する場合もある。

会 長 退 任 挨拶

財団法人 日本植物調節剤研究協会前会長 馬場 昶

このたび、任期を終え、会長を退任することになりました。

観みますと、会長に就任し最初に感じたことは、協会創立に関係した生みの苦しみを味わった者の一人として、当初は業務規模が小さく、業界の支持も十分とはいえなかった協会が、20年の間に建物・施設・組織体制等のととのった立派な協会に成長したことであります。具体的には、農林水産省行政部局と国公立試験研究機関およびメーカーと三者の支持の下に、全国的組織体制で有効且つ安全な新剤が効率的に選定され、迅速且つ円滑に普及に移されて、除草の省力化、農業の生産性向上および業界の発展がはかれたのであり、その実績の積み重ねは業界のゆるぎない信頼と支持を得、ひいては協会の経済的基盤を早く確立することになったと思われます。その間、終始指導に当たられた戸荻元会長、創立以来業務の中心となってエネルギーに活躍し成果をあげられた吉沢専務、そのもとで錬

えられた活動的で有能な幹部職員の努力のあったことを忘れることができないと思います。

なお、吉沢長人氏は昭和60年11月これまでの斯界に貢献した顕著な功績に対し藍綬褒章を受章されたことを特記したい。

現在もこのようなしっかりした基盤の上の軌道に沿って、業務は計画的且つ能率的に、しかも先導的に進められており、不測な事態や解決困難な問題に当面する心配は殆んどありませんでした。

任期中の施設の拡充としては、温室の増棟と共に懸案だった沖積土壌の水田85アールを新たに研究所に近い竜ヶ崎に入手でき、従来の洪積土壌水田と併わせ、広範囲の試験が可能となったことです。

昭和59、60年は、春の天候が不順で、60年は新規水田の整備、試験点数の増加も加わって供試田の作業のおくれが憂慮されたが、連休返上で試験に支障は全くなく、ただ職員の責任感と

健闘に感動した次第です。

昭和59年12月、協会は創立20周年を迎え、記念式典と功労者の表彰および「植調20年史」を刊行した。式典には多数の参加者があり盛大に行なわれ、業界の支持の大きいことにあらためて感銘をうけた。

最近、農業の自然環境および人間の健康におよぼす影響が問題になりつつある。除草剤では、多用によって成分の河川などへの流出問題が憂慮されております。

協会はかねてから除草剤使用の減量化の重要性に着目し、現行の本田期に2～3回も除草剤を使う方法にかわる一発処理剤（有効で安全性の高い混合剤の1回使用）の開発・利用を推進しており、それが環境保全のほか省力化、資材の節減、コストの低下など有利な面も多く、普及の面積の急速な拡大がみられます。

一方、稲作生産コストの低下には、大型機械

化とともに除草剤散布の能率化と安全性確保が必要であります。この問題の重要性を認め、業界や県等の協力を得て、昭和60年度は、大型水田（2ヘクタール以上）を用い、一発処理剤の使用を中心としたモデル試験を10県で実施し、その有効性を確認するとともに今後の推進上の問題点を明らかにすることができました。

任期中に創立20周年記念行事、「植調20年史」の作成、大型圃場におけるモデル実験等、例年に加わった業務が多くありましたが、関係職員の懸命の努力で目的をはたし、大過なく退任することができました。ここに何かとご指導ご鞭撻を頂いた農林水産省関係部局、役員をはじめ先輩諸氏、国公立試験研究機関の研究者および業界の方々に深甚な感謝をささげるとともに協力を頂いた協会職員一同、ことに吉沢専務、吉田常務、小沢事務局長に有難く感謝する次第であります。

昭和59年度冬作(麦類・いぐさ・水稻刈跡) 関係除草剤・生育調節剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部

昭和59年度冬作関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会は、昭和60年9月13日、薬業健保会館において開催された。その結果の概要は、次のとおりである。

当年度試験に供試された薬剤は、のべ34薬剤（作用性試験12、適用性試験25）で、総試験点数は152点（除草剤…小麦100、二条大麦17、

六条大麦6、裸麦2、いぐさ13、水稻刈跡2、生育調節剤…小麦12）である。

供試薬剤の有効成分および判定結果は、第1表のとおりである。また、実用化可能と判定された除草剤・生育調節剤の使用基準は第2表、第3表のとおりである。